説教要旨『ひとつ屋根の下』

ヨハネによる福音書　１４章１５～２４節

聖書箇所には、イエスが十字架で処刑される前夜、別れを告げるようにして弟子達に語り掛けた言葉が記されています。弟子達にとって、イエスの処刑は、あってはならないことでした。それは、単に別れが辛いからだけでなく、イエスに見出していた真理が世に否定されることを意味していたからです。彼らにとってイエスは、敵対者を圧倒し、その真理を世に知らしめる存在でなければならなかったのです（22 節）。しかし、神の子と信じられてきたイエスは十字架で処刑されてしまいました。弟子達、イエス亡き時代を生きる教会の人々は不安の中に放り出されます。そのことを見据えたかのように、イエスは「あなたがたをみなしごにはしておかない」（15 節）、「真理の霊」としてあなたがたと共にいると語られました（17 節）。いくらこの世が、あるいは私達がイエスに対して悲観的になっても、「既に世に勝っている」（16:33）と言われるイエスの真理は決して滅びることなく「生きている」（19 節）のだと告げるのです。

イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（13:34）という掟を真理として伝えました。とは言え、人を愛することがどれだけ難しいかを私達はよく知っています。敵対関係にある相手なら尚更です。愛することに見返りがある訳でもなく、かえって傷つくこともあるでしょう。でもイエスは、「わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」（15 節）と断言するのでした。この言葉を聞いていた弟子達は、イエスに足を洗ってもらったばかりです。それは、人間の汚れや弱さや傷を受け止めるイエスの姿です。そして言われました。「私のしていることは、今、あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」（13:7）。イエスもまた、自分の注いだ愛によって、すぐに見返りを得た訳ではありません。むしろ、返ってきたのは弟子達の裏切りです。しかし、イエスが十字架で処刑された後、弟子達はようやく、イエスが足を洗われたその意味を知り、愛の注ぎ手へと変えられていくのでした。だとすれば、そのイエスが愛されたように愛しなさいと言われるところの「愛」とは、「後で、分かるようになる」との心持ちからなされるもののことでしょう。イエスは、そのような愛を注ぐ者の「ところに行き、一緒に住む」（23 節）と語られます。主イエスは、こう語っておられるのではないでしょうか。「私の愛に気づき、その愛を伝えようとするあなたと、私はひとつ屋根の下にいる。あなたと共に悩み、共に苦しみ、共に痛んでいる。だから、愛をあきらめないで欲しい。『私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい』。これこそが真理であったと、後で分かるようになる」

（文責：望月達朗牧師）